HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『藻汐草』の「一冊本」について
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 121, 左157-左170
Issue Date	2007-02-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/18912
Type	bulletin (article)
File Information	CulturalScience121-157.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 121 (2007)

『藻汐草』の「一冊本」について[1]

佐　藤　知　己

1．はじめに

『藻汐草』はアイヌ語のみを対象とした公刊された辞典としては世界最古のものであり，その流布の状況やその後の各種のアイヌ語彙集に与えた影響を考慮すれば，アイヌ語研究史上極めて重要な位置を占めるものであることは言うまでもない。

この書については既に金田一京助による先駆的な研究がある（金田一1993)。金田一によれば，『藻汐草』には一冊本と二冊本とがあり，一冊本の方が初版とみられるという。この点に関する金田一の見解は次のようなものである。少し長くなるが，以下に必要な個所を引用する。

金田一（1993：11-12)：

然るに西洋人の側では，早くに已に，明治二十年の文科大学紀要として出たチェンバリン教授の「アイノ研究から観た日本の言語･神話及び地名」

[1] この書の書名は，一冊本では題簽に「毛し本草」，序に「藻汐草」とあり，二冊本では題簽に「蝦夷方言藻汐草」，内題に「蝦夷方言藻汐草」，序に「藻汐草」とある。本稿は主に一冊本に関わるものではあるが，特に問題がない限り，便宜的に一冊本，二冊本の両方で用いられている「藻汐草」という名称を用いることにする。なお，本稿は科学研究費（基盤研究（C)，「古文献によるアイヌ語史の構築」，研究代表者北海道大学大学院文学研究科佐藤知己，課題番号 17520245）による研究成果の一部である。

の末尾，蝦夷関係書目の中に，もう次の様なことが明白に述べられてある。

> “Moshiogusa” 藻汐草 by the interpreter Uehara Kumajiro and the Administrator Abe Cho-zaburo. 1804. 1 vol. print. The best known Japanese vocabulary of Aino words and phrases. Tokugawa. Chamberlain.

ここに 1 vol.とあるのを私は 2 vol.の誤りだろうと思っていた。蝦夷方言藻汐草は大学の所蔵本でも，私たちの持って居るのでも，そのほか諸書の引用文を見てもみな二冊であるから。

然るに上田博士に就てチェンバリン教授の持って居られたその「藻汐草」を見たら，中味は吾々のと少しも違わないが，成程一冊本である。表紙は単に仮名文字で『もしほ草』と書いてあって，見返しは只の白紙である。そして何よりも大きい事実は巻尾へ行って一冊本に一葉の跋文の附いていたことであった。跋の全文は次の通りである。

> 蝦夷方言跋
> 蝦夷地東西の諸島を廻るのあいだ蒡午の遑を忍むで方言を書あつめたれども里人の音韻を聞得ざることも少なからず且記すに倭字を用ゆる軌に当らざることも多し極めて誤あるべし訂さんと欲すれど東西千里再問すること甚難し後来同志の友是を正さんことを願ふのみ
>
> 寛政四年五月四日
>
> 通辞　上原熊次郎
> 支配　阿部長三郎

この最後の二行が即ちチェンバリン教授の所謂 By the interpreter Uehara Kumajiro and the Administrator Abe Chozaburo の出所であったことが分明になった。

でこの跋文に拠るとこの書の出来上ったのはまず寛政四年頃で，その頃

には「蝦夷方言」という表題が案になっていたものらしい。表紙に「もしほ草」とあって本文の冒頭の表題に藻汐草とあるのは，これは愈〃出来上ってからの改題ででもあろうか，そしてこの一冊本は版の明瞭なこと，二冊本に消えかかり若しくは消えている濁点半濁点の，一冊本にはなお分明であることなどから考えると，一冊本の方は第一版であるらしい。

上の金田一論文の引用からわかるように，一冊本は二冊本と比べると数が少なく，どちらかといえば稀覯に属する書のようである。このことは『国書総目録』（第一巻）の記述からもうががうことができる。『国書総目録』には，一冊本の版本（寛政四年版）の所蔵先としては東京国立博物館，北海道大学付属図書館[2]，西尾市立図書館岩瀬文庫の三つがあげられているのみである。これに対し，二冊本の所蔵先は国会図書館，静嘉堂文庫，神戸大学，東北大学，早稲田大学，県立秋田図書館，国会図書館，北海道庁，市立刈谷図書館，金刀比羅宮図書館，天理図書館のように多数にのぼっており，このことからも一冊本のほうが二冊本に比べ残存数が少ないことが推測される。今回は，『国書総目録』に記載されている以外の所蔵先に所蔵されている一冊本二種について，その特徴を述べることにする[3]。なお，写本と異なり，版本であるから，テキストの異同は問題にならないように思われるかもしれないが，当時の印刷技術からすれば，たとえ同版と言えども，印刷の実態は極論すれば一冊一冊微妙に違うのであり，微妙な点では資料的な問題に関わってくることが少なくない。また，今日では，国書刊行会による影印本も刊行されており，『藻汐草』に言及する場合，一般にはこの影印本に依拠することが多いと推察されるが，原刊本と影印本とでは当然のことながら細部では微妙な違いがある。それらの違いは通常は重大な問題にはならない性質のものと考えられる

[2] 北大の一冊本には「旧記 661」，「旧記 662」の二種がある。「旧記 661」は J. Batchelor 師旧蔵で，原装が失われ，大学ノートに貼付されている。「旧記 662」は青色系の表紙を持ち，この点で他の一冊本とは異なる特徴を持つ。

[3] なお，必要な場合は北海道大学付属図書館所蔵本（旧記 661，旧記 662）についてもふれる。

が，中には数は少ないとはいえ本文の読みに関わってくる異同もないわけではない。また，金田一以降，『藻汐草』について述べた論文として田中・佐々木（1985）があり，そこでは金田一が触れていない書誌的問題についての興味深い指摘がなされている。以下ではこれらの諸点をふまえつつ『藻汐草』の版本に関わる諸問題のうち，アイヌ語資料として『藻汐草』を用いる場合に無視できない若干の点を中心に述べるものである。

2．苫小牧市立図書館本と市立函館図書館本について

既に述べたように，『藻汐草』の一冊本は二冊本に比べ稀覯に属するが，今回，たまたま『国書総目録』に記載がない二種の一冊本を目にする機会を得たので，ここで簡略ではあるがそれぞれの特徴を述べることにしたい。

今回扱う『藻汐草』一冊本のうち，一つは市立函館図書館所蔵のもの，他の一つは苫小牧市立図書館所蔵のものである（いずれも『国書総目録』には記載がない）。両本とも茶色系の表紙を持ち，「毛し本草」という同一の題簽が付されているので，恐らく原装を保っているものと考えられる。概観についてさらに言えば，函館図書館本は古びて汚れが目立つのに対し，苫小牧図書館本は一見したところ極めて保存が良好で，新本と見紛うばかりである。この点からも貴重な資料と言うことができる。しかしながら，後で詳しく述べるが，残念なことに苫小牧図書館本には一部虫損がみられ，文字が欠落している個所がある。

次に，両者の内容に関してであるが，便宜的にいくつかの場合に分けて特色を述べることにする。

2.1. 両本が同一の内容的特徴を示す場合

『藻汐草』は版本であるから，通常の印刷本と同様，校正もれによるとみられる印刷ミスではないかと思われる個所がいくつかある。また，印刷ミスではないが，印刷の過程で生じたと思われる特徴もある。基本的にそれらは両本で一致している。

例：

5裏　午　ヒカ゜タ

この例では本来「ピ」となるべきところで「カ」に半濁点が打たれているがこれは両本で一致している（この点は二種の北大本も一致）。

6表　■　モルン

この個所の■は印刷ミスの訂正と思われるが，これは両本で一致している（この点は二種の北大本も一致）。

14表　孕み女　ポンコロメノコ

「ポ」は「ホ」の誤りと思われるが，これは両本で一致している（この点は二種の北大本も一致）。

42表　家　ケレル

「レ」は「ン」の誤りと思われるが，これは両本で一致している（この点は二種の北大本も一致）。

44表　的　カ゜ン

「カ」に半濁点が打たれているのは誤りと思われるが，これは両本で一致している（この点は二種の北大本も一致）。

上にあげた例は，もちろん網羅的なものではないが，比較的目立つ印刷ミスと思われる個所について同じ特色を示すことから，このことは両本が内容

的にも基本的に同じ性格のものであることを示すものと言える。

2.2. 両本が同一の印刷上の特徴を示す場合

内容的な面は勿論であるが，以下のように両本が形式（印刷）的にも全く同一の特徴を示す事例がある。

例：

5表 「暈　レライアバマカ」の「イ」の縦棒が切れている（この点は二種の北大本も一致）。

7裏 「左座　シイシヨ」の「ヨ」の下棒が切れている（この点は二種の北大本も一致）。

24表 「待　テイレ」の「テ」の「払い」部分が切れている（この点は二種の北大本も一致）。

29表 「合せ目　ウツ゜ル」の「ウ」の「払い」部分が切れている（この点は二種の北大本も一致）。

29裏 「舟に離れ　チツプマカ」の「プ」の「払い」部分が切れている（この点は二種の北大本も一致。ちなみに，国書刊行会影印本では「ツ」の右肩に他の本にはない点が見られる）。

32裏 「吟味　シユツウピシアン」の「ピ」は横棒が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

36表 「言　ものいひ　イタク」の「タ」の点が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

37 裏 「味ひ　ケーラアン」の「ア」の下部が切れている（この点は二種の北大本も一致）。

44 表 「箭の先尓附る　アイシユヒ」の「ヒ」に点が打たれているが，点は一つしか見えないので半濁点か濁点が明瞭でない（この点は二種の北大本も一致）。

51 表 「獣　チラマンデプ」の「デ」の下の横棒の左側が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

51 表 「鹿　ホンユクの「ユ」の横棒が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

51 裏 「獺」と「哮せる」の間に抹消と見られる黒い長方形が見られる（この点は二種の北大本も一致）。

54 表 「巨蟹　クピシヅ□ベコルベ」の□（不明字）は，「ン」又は「シ」と思われるが，点が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

56 裏 「帆立貝　アツケテセイ」の「ツ」とみられる文字の左の点が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

57 表 「なりひら尓似て　シユルクコロ」の「ユ」の横棒が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

57 表 「粕尾　クンクツ゜」の「ツ゜」の「払い」が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

57 裏 「薄氷　テタルクンクツ゜」の「ン」と思われる文字の点が欠けてい

る（この点は二種の北大本も一致）。

60 裏 「とん本゛う　ハングカチユイ」の「ハ」と思われる文字の右側の点が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

68 裏　ヱトロフの「ト」と思われる文字の点が欠けている。（この点は二種の北大本も一致）。

74 裏 「側　チヨロボキ」の「ボ」の右側の点が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

74 裏　頁の左付け根部分が黒い細い帯状に抹消されている（この点は二種の北大本も一致）。

77 裏 「共尓　イツシン子ノ」の「ノ」の中央部分が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

81 表 「メナシウングル」の「ウ」の下部が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

95 表 「アンタメツ゜イ」の「ツ゜」の左側の点が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

95 表 「ヲマイシヨ」の「シ」の上側の点が欠けている（この点は二種の北大本も一致）。

これらの版面の微妙な特色の一致は，（版本であるからある意味当然ではあるが）両本が印刷の点でも密接な関係にあることを示すものである。

2.3. 両本が印刷上の差異を示す場合

上で述べたように，両本は印刷上，共通の特徴を示す場合が多いが，中には両本で微妙に異なる特徴を示す事例もある。以下では便宜的に函館図書館本を「函」，苫小牧図書館本を「苫」と略称して述べることにする。

例：

7 裏 「砂岸　ヲタウニ」は，函では上棒の右端が切れているが，苫ではやや薄いもののより刷りが鮮明である（北大本は二種とも函に似る）。

9 裏 「一昨日　ホシケヌマニ」は，函では「シ」の上点が欠落していて「ホンケヌマニ」に近い状態であるが，苫では明瞭に「ホシケヌマニ」と読める（北大本は二種とも函に似る）。

17 表 「脚の下　ヌウラシヤム」の「ヤ」は函では刷りが薄く「マ」に近い状態であるが苫（北大本二種も同様）では明瞭に「ヤ」と読める。

19 裏 「肥る　ビヱー」は苫（北大本二種も同様）では刷りが薄いものの判読できるが，函では判読困難である（なお，国書刊行会影印本でも，「ヒ」の濁点が完全に欠落している。

30 裏 「入れて志まふ　ヲマレアノキタ」が函では「ヲマレ」が刷りが薄く判読困難であるが，苫（北大本のうち「旧記 661」も同様）では明瞭である。なお，北大本のうち「旧記 662」は黒く抹消されている。

47 裏 「如此胴金　サヤツラ」の「ヤ」は函では「マ」に近く見えるが苫（北大本二種も同様）では判読可能である。「ラ」も函（北大本のうち「旧記 662」も同様）は薄いが苫（北大本のうち「旧記 661」も同様）は明瞭である。

55 表 「さよ里　フンベデツポ」の「デ」の点は函（北大本のうち「旧記 662」も同様）では薄いが苫（北大本のうち「旧記 661」も同様）では判読可能である。

61 表 「貝鯨　サンナコル」の「サ」は函（北大本二種も同様）では薄いが苫では明瞭である。

66 表 「姫百合　イマギバル」の「ル」の左側部分が函（北大本のうち「旧記 661」も同様）では薄いが苫（北大本のうち「旧記 662」も同様）では明瞭である。

80 表 「ヲシヤガンケ」の「シ」の上の点が函（北大本のうち「旧記 662」も同様）では不明瞭だが苫（北大本のうち「旧記 661」も同様）では明瞭である。

これらは試験的な検討の結果に過ぎないので，精査する必要はあるが，概略的な傾向としては苫小牧図書館本のほうが版面の状態の良い場合が多いと言えそうである。

2.4. 苫小牧図書館本の虫損個所について

これまで述べてきたことからあきらかなように，苫小牧図書館本は保存や刷りが極めて良好な，ただでさえ稀覯な一冊本の貴重な版本と言ってよいが，残念ながら無視できない虫損が数カ所ある。それらをあげれば以下のごとくである。

10 表 「如此星　イワンリコプヽ」の「コ」が苫では虫損で判読困難である。

10 裏 「如此星　イナウクノカヽ」の「ノ」が苫では虫損で判読困難である。

11 表　「龍神　レフンカモイ」の「モ」が苫では虫損で判読困難である。

11 裏　「閻魔王　ニツツ子カモイ」の「モ」が苫では虫損で判読困難である。

苫小牧図書館本を利用する場合は上記の虫損個所については他の本を参照する必要があると言える。

2.5. 田中・佐々木（1985）の指摘個所について

田中・佐々木（1985：20）は，金田一が一冊本と二冊本の存在を指摘したのに対し，一冊本にも内容によって甲乙の二種がある，という重要な指摘を行っている[4]。その内容[5] と今回検討した諸本の比較結果は以下のようなものである。

二十五丁裏七行目　甲本は「フーレカ」であるが，乙本は「レ」が左右逆に彫られている（甲本：函，苫，北大「旧記 661」，乙本：北大「旧記 662」）。

二十八丁表十二行目　甲本は「アンラムオチユウヱ」に傍線がないが乙本には傍線がある（甲本：函，苫，北大「旧記 661」，乙本：北大「旧記 662」。

三十丁裏十五行目　甲本は「入れてしまふ　ヲマレアノキタ」とあるが，乙本は「オマレアノキタ」が抹消されている（甲本：函，苫，北大「旧記 661」，乙本：北大「旧記 662」）。

---

[4] この指摘は『藻汐草』研究において画期的な発見であるが，調査対象とした諸本の数をあげていないため，「甲本，乙本」という表現を用いているにもかかわらず，指摘されている特徴がある一本にのみ見られる特徴なのか，複数の諸本にみられる特徴なのか，必ずしも判然としない印象を受ける。また，対象とした諸本の書誌情報を全くあげていないため，第三者には検証不能な記述となっているのは惜しまれる。

[5] 便宜上，表現は改変してあることをお断りしておく。

三十五丁裏二行目以降　甲本は白いままであるが，乙本は黒くなっている（甲本：函，苫，北大「旧記 661」，乙本：北大「旧記 662」[6]）。

以上から明かなように，今回検討した函館図書館本，苫小牧図書館本のいずれもが「甲本」に属することがわかる[7]。

2.6. 一冊本と二冊本の資料的位置付けについて

１．で引用した金田一の見解では，『藻汐草』の一冊本は初版とみられ，従って単純に考えれば資料的にも一冊本のほうが重要であるということになるわけであるが，二冊本も合わせて検討してみると，そうとも言えない事情が存在する。最初に断った通り，本稿は基本的には一冊本に関するものであり，二冊本については本来ならば稿を改めて論ずべきであるが，重要な問題であるので問題の所在だけを簡単に述べる。

既に引用したように，金田一は，「一冊本は版の明瞭なこと，二冊本に消えかかり若しくは消えている濁点半濁点の，一冊本にはなお分明であることなどから考えると，一冊本の方は第一版であるらしい」と述べている。このこと自体は書誌学的に正しい結論である可能性が高いが，だからと言って一冊本が資料的に二冊本より常に優れているとは必ずしも言えない面があることに注意しなければならない。2.3. であげた例を以下に再度あげる。

例：

19 裏　「肥る　ビヱー」は「ビ」が苫（北大本二種も同様）では刷りが薄いものの判読できるが，函では判読困難である（なお，国書刊行会影印本でも，「ヒ」の濁点が完全に欠落している）。

---

[6] ただし，「黒い」とは言っても，真ん中は白いままである。

[7] なお，「乙本」は筆者が目睹した限りではこれまでのところ北大本「旧記 662」しかない。「乙本」の位置づけの確定には，乙本に属する諸本のさらなる検討が必要ではないかと思われる。

61 表 「貝鯨　サンナコル」の「サ」は函ではかなり薄いが苫では明瞭である（北大本二種も同様）。

ちなみに，これらの個所について，たまたま閲覧することができた神戸大学付属図書館所蔵の二冊本を参照してみると，「肥る　ビヱー」，「貝鯨　サンナコル」のいずれの問題個所についてもはっきり判読が可能である。この個所について，一冊本や影印本の中にも判読困難なものがあることを考えると，このような事例は一冊本が万能であるとは必ずしも言えないことを示していると言える[8]。

3．おわりに

本稿では，稀覯と言われている『藻汐草』の一冊本について，その所在をあらためて二件追加報告し，それぞれの書誌的な特色の概略を述べた。また，一冊本が二冊本より無条件に優れているとは必ずしも言えない可能性を指摘した。なお，本稿はあくまでも限られた資料に関する部分的な指摘にとどまるものであり，『藻汐草』のより詳細な研究には二冊本も含めたより総合的な研究が必要であろう。今後の課題としたい。

謝辞

苫小牧市立図書館の一冊本の存在について御教示下さった高木庄治氏，並びに資料の閲覧に際してお世話になった各図書館にお礼申し上げる。

[8] ちなみに，弘南堂書店による二冊本の影印本では，「ビヱー」の「ビ」は判読可能であるが，「サンナコル」の「ナコ」は完全に欠落している。

参考文献

金田一京助（1993），「蝦夷語学の鼻祖上原熊次郎と其の著述」『金田一京助全集　6』（三省堂），9-39.
金田一京助解説（1969），『蝦夷方言藻汐草』（弘南堂書店）
金田一京助解説，成田修一撰（1972），『藻汐草』（国書刊行会）
国書研究室（編）（1989），『補訂版　国書総目録 1』（岩波書店）
田中聖子，佐々木利和（1985），『近世アイヌ語資料について ── とくに『もしほ草』をめぐって ──』」『松前藩と松前』24，17-32.
上原熊治郎（1792），『毛し本草』（市立函館図書館蔵，00388/005/3/001）
上原熊治郎（1792），『毛し本草』（苫小牧市立図書館蔵，H 129 U）
上原熊治郎（1792），『毛し本草』（北海道大学附属図書館蔵，旧記 661）
上原熊治郎（1792），『毛し本草』（北海道大学附属図書館蔵，旧記 662）
上原熊治郎（1804），『蝦夷方言藻汐草』乾，坤（神戸大学付属図書館住田文庫蔵，6 A-40）